イタリアバロック音楽の系譜を辿る

中山 裕一

バロックヴァイオリンリサイタル

J.M.ルクレールのルーツを探る旅

2011年12月7日(水)

19時開演(18時30分開場)

兵庫県立芸術文化センター
神戸女学院小ホール

■制　作：日本テレマン協会 http://www.telemann.ws/

中山裕一リサイタル寄せて

もう随分前のことなので、いつだったか覚えていないのだが、ある日、延原武春氏と偶然にホテルのコーヒー・ショップで出会った。そばにはおとなしそうで上品な感じの美青年がいて、若いヴァイオリニストだと紹介された。それが中山裕一君だった。おそらく彼が大学卒業間もない頃だと思うが、間もなくしてテレマン室内オーケストラのヴァイオリン・セクションに彼の姿が見られるようになり、瞬く間にコンサートマスターの席に付いていた。以来、日本テレマン協会のコンサートでは、いつも目にしていたし、その演奏も聴いてきた。そしてリサイタルも1997年8月を皮切りに、これまで7回を聴いてきた。おそらく彼のリサイタルのほとんどを聴いていると思うのだが、その演奏は、日常の中山君そのまま（と言っても個人的な付き合いはないので、時折、顔を合わせた時に挨拶する程度のことからしか判断できないのだが）、つまり上品で礼儀正しい好青年をそっくり写したような折り目正しさが特徴と言えるだろう。バロック・ヴァイオリンを始めてから、サイモン・スタンデイジに師事するようになってからもそれは同じ。しかし、意欲的にリサイタルを開いてきた彼は、スタンデイジの影響もあってか、ルクレールに重点を置くようになっていた。今回はその流れの中にあって《ルクレールのルーツを探る旅》となっている。相変わらず品が良くて折り目正しい演奏をしてくれることと期待しているが、欲を言えば、そろそろ一皮むけてもいい頃ではないか、ということ。師のスタンデイジもそうなのだが、少し真面目過ぎて、巧いのだけれど何かもうひと味欲しいという演奏から抜け出し、少々羽目を外したような遊び心とか、作品から感じたものをストレートかつ大胆に表現する姿勢が加われば、もっと魅力的な演奏になるのではないか、と思っている。大好きな曲を、どうぞ楽しんで演奏して下さい。

福本 健（音楽評論家）

Program

アルカンジェロ・コレッリ
Arcangelo Corelli (1653-1713)

ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ ホ短調 Op5-8
Sonata for violin and basso continuo in E minor Op5-8
1 Preludio(Largo) 2 Allemanda(Allegro) 3 Sarabanda(Largo) 4 Giga(Allegro)

アントーニオ・ヴィヴァルディ
Antonio Vivaldi (1678-1741)

ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ イ長調 Op2-2
Sonata for violin and basso continuo in A major Op2-2
1 Preludio(a Capriccio.Presto) 2 Corrente(Allegro) 3 Adagio 4 Giga(Allegro)

ジョバンニ・バッティスタ・ソーミス
Giovanni Battista Somis (1686-1763)

ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ ト短調 Op2-10
Sonata for violin and basso continuo in G minor Op2-10
1 Adagio 2 Allegro ma poco 3 Allegro

ジャン＝マリー・ルクレール
Jean-Marie Leclair (1697-1764)

ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ ト短調 Op5-11
Sonata for violin and basso continuo in G minor Op5-11
1 Andante 2 Allegro 3 Largo 4 Giga(Allegro ma non troppo)

休　憩

ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル
Georg Friedrich Händel (1685-1759)

ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ ニ長調 HWV371
Sonata for violin and basso continuo in D major HWV371
1 Affettuoso 2 Allegro 3 Larghetto 4 Allegro

ジャン＝マリー・ルクレール
Jean-Marie Leclair (1697-1764)

ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ イ長調 Op9-4
Sonata for violin and basso continuo in A major Op9-4
1 Andante Spirituoso 2 Allegro 3 Largo(Sarabanda) 4 Allegro assai - Presto

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ
Johann Sebastian Bach (1685-1750)

ヴァイオリンとチェンバロのためのソナタ ト長調 BWV1019
Sonata for violin and obbligato harpsichord in G major BWV1019
1 Allegro 2 Largo 3 Allegro 4 Adagio 5 Allegro

（調律：A=417Hz）

Program Note

イタリアの光彩、若きジャン＝マリーの面影

本日のリサイタルでは、中山がライフワークと位置付けているフランス・バロックの鬼才ヴァイオリニスト・ルクレールを核に据え、彼がイタリア・トリノで師事したソーミス、ソーミスの師であるコレッリ、コレッリの作品から多くを学んだヴィヴァルディ、そしてバッハとヘンデル、互いに有機的な関連を持つ作品が配されている。中山の音色がこれらを改めて結びつけ、この場でしか体験できぬ、響きの宇宙を創り出すに違いない。

コレッリ：
ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ ホ短調 (Op5-8)

イタリア・バロックの巨人、アルカンジェロ・コレッリ(1653 ～ 1713)はボローニャでヴァイオリンを学び、10 代後半で早くも頭角を現した。1675 年頃にローマへ移り、歴代の枢機卿の庇護を受けた。55 歳での引退まで多くの作品を生んだが、大半が本人の意思で破棄され、出版に至ったのはわずか 6 つの曲集のみ。しかし、それらはいずれも技巧に走らず簡潔ながら演奏効果は高く、魅力に溢れた傑作ばかりだ。

作品 5 は 1700 年にローマで出版され、ブランデンブルク選帝侯妃に献呈。この曲集は全欧州で評判を呼び、直後にアムステルダムやロンドンで出版されただけでなく、10 年間に 10 回以上も再版され空前の大ヒット作に。曲集は全 12 曲からなり、前半は緩 - 急 - 緩 - 急 - 急の教会ソナタ、後半は前奏曲の後に舞曲が続く室内ソナタの形式をとる。第 8 番は悲しみに満ちたプレリュード、音の跳躍がチャーミングなアッレマンド、通奏低音が着実に歩みを進めるサラバンダ、悲しみが疾走するジガからなる。

ヴィヴァルディ：
ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ イ長調 (Op2-2)

もう1人のイタリア・バロックの巨人、アントーニオ・ヴィヴァルディ(1678 ～ 1741)はコレッリに遅れること四半世紀、ヴェネツィアに生まれ、ヴァイオリンの名手だった父から音楽の手ほどきを受けた。15 歳で聖職者となり、10 年後の 1703 年には司祭に。同時期にピエタ音楽院で指導を始め、女子学生たちで結成された楽団のために多くの作品を書いた。1705 年に作曲されたトリオ・ソナタ集（作品 1）は、コレッリの影響を強く感じさせる。

これに続く作品 2 のヴァイオリン・ソナタ集は 1709 年、ヴェニスで出版。イ長調ソナタは全 12曲の第 2 曲目に収録され、「気まぐれな前奏曲」と題した即興的な色合いの濃い冒頭楽章に続き、活発な印象の第 2 楽章コレンテ、華麗なインプロヴィゼーションが期待される第 3 楽章アダージョ、明るいジガの最終楽章が連なっている。

ソーミス：
ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ ト短調 (Op2-10)

ジョバンニ・バッティスタ・ソーミス(1686 ～ 1763)は、イタリアのヴァイオリニストで作曲家。1703 年から 3 年にわたってコレッリに師事した後、トリノ宮廷楽団のコンサートマスターなどを務めた。1731 年に渡仏し、33 年 4 月にはパリの「コンセール・スピリチュエル」で演奏したとの記録が残っている。生前にヴァイオリン・ソナタを中心に 8 つの曲集を発表したが、作品 2 は 1723 年にトリノで出版。ちょうどルクレールが彼に師事し始めた時期と重なる。

第10曲のト短調ソナタは、付点リズムと32分音符がスパイスのように効く第 1 楽章に続き、曲の核をなす第 2 楽章では 3 連符の応酬が感情を高ぶらせてゆく。そして、後奏のように短い最終楽章はどこか諦観の念が感じられる。今ではすっかり忘れ去られたソーミスの作品。録音もほとんど存在しない。本作はおそらく、日本初演となろう。

ルクレール：
ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ ト短調 (Op5-11)

衝撃的な最期を迎える波乱の生涯とは対照的に、ジャン＝マリー・ルクレール (1697 ～ 1764) の作品は、えも言われぬ気品と穏やかさに満ちている。リヨン出身。25 歳でトリノ歌劇場の踊りのプリンシパル兼教師となったが、ソーミスにヴァイオリンを師事したのがきっかけで、演奏家への道を選択。1723 年にパリで最初のヴァイオリン・ソナタ集を出版して以降、38 年までに全 4 巻、計 48 曲を発表した。この間、コンセール・スピリチュエルで大好評を博す一方、名手として名を馳せていたピエトロ・アントニオ・ロカテッリ (1695 ～ 1764) にも師事。後にフランス＝ベルギー楽派の始祖と位置付けられるなど重要な存在となるが、晩年は貧民窟で隠遁生活を送り、67 歳の時に何者かの凶刃に倒れた。

ト短調ソナタは、1734 年出版の第 3 巻の第 11 曲にあたる。悲しみを湛えたヴァイオリンの旋律を縫い取る通奏低音が、心の痛みを倍加させる第 1 楽章。無窮動的にソロが疾走する第 2 楽章、重音を交えて光に満ちるシシリアーノの第 3 楽章を挟み、「急ぎ過ぎるな」と指示されたジーグの最終楽章で閉じられる。

ルクレール：
ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ イ長調 (Op9-4)

一方のイ長調ソナタは、技巧的にも頂点を極めた 1738 年出版の第 4 巻の第 4 曲。「スピリトゥオーソ（生き生きと）」と指示され、イタリア風の自由な雰囲気漂う第 1 楽章に始まり、楽しい楽想ながら重音の応酬が奏者に苦難を強いる第 2 楽章、内省的な第 3 楽章サラバンダ、軽やかな第 4 楽章、スリリングなプレストの最終楽章が続く。

ヘンデル：
ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ ニ長調 (HWV371)

ドイツ・ハレに生まれ、ロンドンで活躍したゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル (1685 ～ 1759) は 1706 年から 4 年間、イタリアに滞在。ローマで「時と悟りの勝利」や「復活」などのオラトリオを作曲し、その初演を手掛けたのは、コレッリがコンマスを務めていたオットボーリ枢機卿のオーケストラだった。この間、器楽のための曲はほとんど書いていないが、コレッリから多くの要素を吸収したことは、その後の作品群が如実に物語っている。

このニ長調ソナタはヘンデルの晩年、1750 年頃の作曲。ヴァイオリン・ソナタとしては 1730 年頃にオランダのロジェ、続いてロンドンのウォルシュから出版された、全12曲の曲集以来のものであり、「第 13 番」と称されることも。ヘンデルのヴァイオリン・ソナタには本当に彼の手によるかが疑わしい作品もあるが、本作に関しては自筆譜が現存し、紛れもない真作。第 1 楽章の主題は、1707 年頃に作曲されたフルート・ソナタに初登場以降、何度も転用されたヘンデルのお気に入り。イタリア的な大らかさを持つ第 2 楽章、深い精神性を湛える第 3 楽章、後にオラトリオ「イェフタ」第 3 幕のシンフォニアにも転用された快活な最終楽章が続く。

バッハ：
ヴァイオリンとチェンバロのためのソナタ ト長調 (BWV1019)

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ (1685 ～ 1750) のオブリガート・チェンバロを伴う 6 曲のソナタ集は、無伴奏作品に比べ演奏機会は少ないが、完成度の高い佳品。ケーテン時代の 1720 年頃には一応の完成を見たと考えられる。チェンバロの右手と左手が独立した声部を奏で、いわば「トリオ・ソナタを 2 人の奏者で演奏する形態」を採り、モーツァルト以降の近代的なヴァイオリン・ソナタを先取りした重要な作品。6 曲はそれぞれが個性的な輝きを持ち、曲集全体として見ても、素晴らしいバランスを保っている。

曲集の中で唯一、5 楽章構成を採るなど、ひときわ異彩を放つ第 6 番は陽光に満ち溢れる。コレッリの作品 5 などを通じて、バッハが憧れたイタリア趣味の究極の発露のひとつ。いくつかの版が残るが、本日はライプツィヒ時代初期の 1724 ～ 27 年に改訂された最終稿で演奏する。喜びに満ちたプレリュード風の第 1 楽章に続き、内省的な第 2 楽章は属和音上で終止。これを受け止めるチェンバロ独奏の第 3 楽章は、情熱に満ちる。第 4 楽章が静かなため息で終わると一転、冒頭楽章を彷彿させる明るいジーグの最終楽章で幕となる。

寺西　肇（音楽ジャーナリスト）

Profile

ヴァイオリン：中山 裕一
Violin／YUICHI NAKAYAMA

バロック楽器奏者のスペシャリストとして、関西を中心に全国的な活動を展開している。2000年にはコレギウム・ムジクム・テレマン（1990年に結成した日本テレマン協会のバロック楽器の楽団。2011年に解散）のコンサートマスター就任。就任後初の定期演奏会ではオーケストラを見事にまとめ、「ブランデンブルク協奏曲 第5番」のソロ演奏においても「聴き応えがあった。滑らかな流れをもって進んだ中での、美しい掛け合いなども注目された」（「音楽の友」2000年9月号：原明美）と評される業績を残した。

また10回を超えるバロックヴァイオリンのソロリサイタルはその評価も高く、特に2000年10月に開いた中山裕一バロックヴァイオリンリサイタル No.6「バッハ：ヴァイオリンとチェンバロのためのソナタ全6曲」（共演：中野振一郎）は、平成12年度大阪文化祭奨励賞を受賞。「闊達さを感じさせられる演奏」「フレージングやアーティキュレーションなどがよく考えられており、端正にまとめられていた」「中野との対話も親密で、生き生きとした表情は楽しかった」（「音楽の友」2000年12月号：福本健）という高い評価も得ることが出来た。2001年10月のリサイタルでは文化庁芸術祭参加公演に認められた。2003年にはバッハアルヒーフ主催「バッハ フェスティバル イン ライプツィヒ 2003」に招聘され J.S. バッハ「2つのヴァイオリンのための協奏曲」などを好演。2010年 NDR MUSIKTAG 2010 にゲオルク・フィリップ・アンサンブルメンバーとして参加。2011年10月エンリコ・オノフリ with チパンゴ・コンソート Live in Japan 2011 公演に参加。

相愛大学音楽学部卒業。ヴァイオリンを釈伸司、小栗まち絵の各氏、バロックヴァイオリンを Simon Standage、Ulla Bundies、上野博孝の各氏に師事。現在、テレマン室内オーケストラメンバー、相愛大学非常勤講師、大阪市ユースオーケストラ指揮者。

中山裕一オフィシャルホームページ
http://www.yuichinakayama.com/
（12月中旬開設予定）

チェンバロ：高田 泰治
Cembalo／TAIJI TAKATA

チェンバロおよびフォルテピアノ奏者。2002年神戸新聞松方ホールにてテレマン室内オーケストラとともにピアノ、フォルテピアノ、チェンバロのそれぞれの協奏曲を一夜で演奏するという公演にてデビュー。

チェンバロのソロ活動としては、2009年にレマーゲン（ドイツ）においてチェンバロコンサートが開かれ好評を博す。帰国後 J.S. バッハの「ゴルトベルク変奏曲」を好演（大阪）。2009年・2010年の日本テレマン協会定期演奏会（東京）にてオールJ.S. バッハプログラムを好演。この演奏内容がバッハ研究の総本山「バッハ・アルヒーフ」（ライプツィヒ）に高く評価され、2011年5月に同団体の定期演奏会に出演（日本人鍵盤奏者としては初めての招聘）し好演。2011年10月には同公演と同じ曲目を収録したCDをライヴノーツよりリリース。

チェロ：曽田 健
Cello／KEN SOTA

日本テレマン協会オーケストラ・ディレクター。テレマン室内オーケストラ首席チェロ奏者。京都市立芸術大学在学中の2002年より日本テレマン協会の演奏活動に参加。翌年、ライプツィヒをはじめとするドイツへの演奏旅行にも参加しソリストも務める。以来指揮者・延原武春の音楽的な補佐、およびステージのトータルなコーディネイターをつとめ、2005年より首席奏者に就任。

2006年の日本テレマン協会第170回定期演奏会ではF.J.ハイドン作曲「協奏交響曲 変ロ長調 Hob.I-105」においてソリストを務め好評を博す。

オーケストラ・ディレクターとしての才が大いに発揮されたのは2008年延原武春が指揮した「ベートーヴェン交響曲全曲公演」。この成功は彼の補佐と助言があってこそのものと指揮者自身が語っている。その後も数々の公演を成功に導いている。